

六〇年安保闘争と樺美智子

天野恵一

「何の雑誌だったろうか、かつてイタリアの法医学者が殺人事件の被害者の眼球の水晶体から、その人が惨殺される寸前、この世で最後に見た恐怖の映像を復元するのに成功したという記事を読んだことがある」。

「路傍に打ち捨てられて絶命していった人々の眼球には、いまは、機動隊の靴底が、決して消えることのない怨みとともに刻印されているが、このままうちずござれば、やがては、次々と斃れる犠牲者の視野の中に、にんまりと笑い、邪悪な瞳を光らせている共犯者の顔、———そうあなたの顔が映ることにならないとは限らないのである。かつて魯迅が言った『いま住んでいる場所が人間の世界ではないことを感じる』というその非人間の世界とは、そういう世界のことを言うのだと、私は思う」。

ここに引いたのは、樺美智子をトップに、闘いの中の死者たちを論じた論集に、編者として寄せた高橋和巳の「死者の視野にあるもの」(『明日への葬列』一九七〇年、合同出版)の書き出しと、締めくくりの文章である。

六〇年安保闘争から五〇年の今年、江刺昭子の『樺美智子 聖少女伝説』(二〇一〇年五月、文藝春秋社)が刊行された。それを契機に、改めて樺美智子の死因をめぐる問題がクローズアップされた。江刺の本、あるいは、樺美智子とともに闘った東大生の友人たちの座談会(江刺が司会)『聖少女 樺美智子の青春と死』(『文藝春秋』七月号)や詩人・御庄博美(医師・丸屋博)『樺美智子さんの死、五十年目の真実———医師として目撃したこと』(『現代詩手帖』七月号)、インタビュアー『樺美智子さんの死因と反核医師としての奇跡』(『市民の意見ニュース』、二〇一〇年10/1号、市民の意見30の会、東京)などを読みながら、すぐ思い出されたのは、高橋のこの論文のこのくだりであった。

ニンマリと笑う邪悪な目をした惨殺の共犯者」という言葉が、まず浮かんだのである。

長く「反安保」をテーマとする運動に取り組み続けてきた私(たち)のとは、樺の死は警察(国家)権力による虐殺であることは、自明の事柄であり続けてきた。しかし、世の多数派の見解は、そうではなかった。そのことは、私も、あの(6・15)闘争のリーダーの一人であった、学者ジャーナリストとして高名な男が、「あれは俺たちが踏み殺したんだ」などと公言していることなどを通して自覚してはいた。転向した男だから、敢えてそう言ってみせているのではない、それが世間の通説として定着しているから、あたりまえのことのように語られているのだ。

江刺はその本の「プロローグ」で、「人なだれによる圧死なのか、首を絞められた扼死なのか、謎のままになっている死因も改めて検証する」と書いている。せめて「謎」とするしかない状況が続いてきたのである。だから、御庄のような医師が、五〇年前の(真実)を明らかにしてみせるための「証言」が、あらためて語られなければならないのだ。

私たちの自明の認識と警察発表に誘導された「人なだれによる事故死」との広く共有されている認識との間のギャップ。このギャップの意味を考えてみることを通して、あらためて(六〇年安保闘争)を歴史的に評価する作業に取り組みむべきではないか。このように思い立ち、私は連続学習会(もうやめよう!日米安保条約)PARTIIの第一回江刺昭子の話を聞いて、樺の死因をめぐる論議について、より正確な認識を私たちも共有するようにすべきではないかと提案。

そして、一二月四日に「六〇年安保闘争と樺美智子」のテーマで江刺の話を聞く「学習会」が持たれたのであった。

江刺は、まず「自分は当時から活動家といわれるような人間ではありません。まったくのノンポリ学生でした。でも、「そういう立場だったから、あれだけ広く関係者インタビュアーができ、ああした本がまとめられたの

よ」、という声をかけてくれる関係者は少なくありません」、という具合に話し出した。

そして、ゆつくりと、「生まれたのが一九三七年で、もの心がつくころは太平洋戦争真っ最中、中学に入ると朝鮮戦争、高校時代は二大陣営の冷戦のすさまじさに心を打たれ、平和ということが強い念願となった」樺美智子の人生の軌跡を家族とのエピソードをまじえながら、具体的にたどってみせることをはじめた。そのことを通して、江刺は「六〇年安保闘争の唯一の死者として、伝説の人物として、聖化され、美化されている」樺像のペールを剥がし、その実像に接近しようと努力した自分の作業を明示してみせる。そこには、両親の不和に悩み、直線的に平和を求める革命運動（組織）のリーダーとなっていく、（当時としてはめずらしい）東大の才女が存在していた。「全学連」の過激な活動に引つ張られて悲劇の死を迎えた女性などではなく、その過激な行動を主体的に組織すべく活動し続けた、いちずな運動のリーダーが迎えた死であった。江刺は、そうした実像を明示する作業を通して、樺をおとしめたいわけでもなく、逆に英雄的活動家としてあがめてみたいわけでもない、すこぶる平凡だがきまじめで直情的な彼女の平和への〈思い〉をこそ、あらためて共有していきたい、江刺は、そう直接に語ったわけではないが、聞いている私たちには、江刺のそういう〈思い〉がよくつたわつてくる話しぶりであった。

さて、死因については、江刺は、警察による「扼死」という慶応大学の解剖所見（中館所見）の存在（結局これは公開されなかった）や、その解剖に立ち合った坂本昭（当時社会党衆議院議員で、医師）が、東大鑑定所見（上野所見）に依拠した検察（警察）の「人なだれ圧死」説を、具体的な事実（目撃証言や写真を使った）によって覆そうとし続けた執念の作業を、単行本刊行後に書いた論文（「樺美智子の死因をめぐって」『インパクト』、二〇一〇年九月、一七六号）の自分の文章や、その後手に手にした資料などを示しながら、「坂本昭や丸屋修らが主張するように、下から警棒で腹部を突き上げられ、朦朧としたところを、相撲の喉輪攻めのような形で、のどに手をかけられて絶命したと考えるのが妥当」と、冷静に結論づけた。

その話しぶりは、〈権力による虐殺〉ときめつけてかからずに、できるだけ客観的に事実に向かうとした努力が生み出した結論であろうことを思わせるものであった。

参加者を交えての討論もはずんだ。

「権力は何故、事故説をでつち上げたのだろうか?」「そんなことは、あの状況、あれだけの人波が国会と首相官邸を取り囲んでいる状況を考えれば、岸政権が崩壊するにとどまらない国家の危機的状況が現出することに脅えたからだろう」

私は、こうした死因をめぐるやりとりを通して、「反ハガチー」デモ報道あたりから、反対行動（岸政権批判）に好意的だったマスコミの報道の音色が、デモ非難のトーンを強くする方向へ転じたしていることも思い出していた（米国が前面化する局面でこの転換は始まったのだ）。

樺の「死因」をねじまげる介入（日米権力者の）を通じて、マスコミの暴力非難の「拳国一致」の足並みはそろえられていたのだ。

警察による虐殺という権力にとつてのピンチをテコに状況を逆転させられたのである。

そういうプロセスとして安保闘争の歴史が書かれてこなかった。こういう視点からの整理こそ重要ではないか、などと、あれこれ考えた。

『「圧死」というマスコミと権力の一体化したねつ造報道をこれまで信じていた自分が恥ずかしい』という現役の新聞記者の参加者の純情な発言あり、「国会デモのために定期を買って、毎日通っていた」という元教員（北村さよ）の「反ハガチーデモは『教組』

わりあての動員で旗を持参で参加した。ハガチーが乗ったヘリコプターのプロペラの風力で、その竹の旗がバラバラに裂けてしまい驚いたこともよく記憶している」という安保闘争の思い出発言もあり、彼女の持つてきてくれたお菓子を、みんなで食べながらの論議は時間ぎりぎりまで続いた。

「ニンマリと邪悪な目をした惨殺の共犯者」になることを拒否する、私たちの歩みは、あらためて、こおつかから始まる。そう思える、いい集まりであった。

（あまの・やすかず／反安保実）